次回企画展予告

第14回企画展

朝鮮陶磁シリーズ-9

高麗青磁の
鉄絵と鉄彩展

会期：昭和62年1月13日(火)～3月29日(日)
会場：当館企画展示室

■高麗青磁の鉄絵と鉄彩について

器物の表面に鉄絵具で装飾文様を施し、その上に青磁釉を掛け焼成したものを青磁鉄絵（一般的に絵高麗）という。焼成方法が安定せず、還元・中性・酸化焔焼成等に分かれ、焼成後の釉色は、灰青色から黄褐色と幅があり千差万別である。施された文様は、中国南部の鉄絵や磁州窯などの影響を受けながらも、牡丹、唐化唐草文等次第に高麗化された独自の絵文様へと展開している。平板になり易い青磁象嵌の表現方法と違って、青磁鉄絵の筆勢は、絵に強弱と流麗さとを伴い一味違った境地をみせている。

一方、青磁の釉下に鉄絵具を塗りつめたものを青磁鉄彩（俗に黒高麗）というが、鉄絵と違って装飾技法は、黒地をバックにした地味なものである。方法としては、全面に鉄絵具を塗りつめ文様のないもの、黒地に陰刻又は白象嵌したもの、黒地に白泥文様を施したもの等がある。

この様な技法は、高麗青磁の装飾技法に幅をもたせると同時に、高麗陶磁に深みと独自性を兼ねそなえさせたといえる。

青磁鉄絵、鉄彩の陶片は、全羅南道康津郡大口面や海南郡山二面珍山里などの窯址で発見されている。

この企画展では、約50点をもって器形・文様の多様性を紹介し、併せてその変遷の跡を探ろうとするものである。（K）

青磁鉄絵花鳥文壺

青磁鉄絵牡丹唐草文水注

青磁鉄彩象嵌人参草文瓶

アンケート集計報告

去る11月8日に開催された講演会の出席者にアンケートをお願いしましたところ、92名中、88名の方より回答を頂きました。御協力ありがとうございました。以下はその一部です。

1.回答者　一般会員　65名
　　家族会員　13名
　　研究会員　10名　　計88名

2.今回の講演会の内容について
　a．大変有益であった……72名
　b．内容がやや専門的で理解できない箇所があった。……8名
　c．もう少し専門的な話を聞きたかった。……2名

3.講演会一般に対する要望
- ○2、3ヶ月に1回程度の開催にしてほしい。
- ○平日の夜や日曜日にも開催を検討してほしい。
- ○プロジェクターを2台使って、スライドを2枚同時に映写できないか。
- ○冷暖房設備のある、もっと音響効果の良い会場へ変更できないか。
- ○講演会の内容についてあらかじめレジメを配ってほしい。
- ○日本の陶磁器に関する講演会をもっと開催してほしい。
- ○テーマをもっとやさしいものにしてほしい。
- ○館蔵品に関する詳しい解説、エピソード等をまじえた講演会を開いてほしい。
- ○各企画展の開催中、それについての解説的な講演会を開いてほしい。
- ○一つのテーマを設定してある程度の期間、数回に亘る連続性のある講座を開講してほしい。
- ○宗教と陶磁に関するテーマで開いてほしい。
- ○「京焼の歴史」の続きを聞きたい。
- ○中国・朝鮮陶磁ともに最新の発掘調査報告を聞きたい。

その他、いろいろな御意見がありましたが、今後の活動の参考にさせて頂きたいと存じます。今回は紙面の関係上、アンケートの詳細を掲載できなかったことを御了承下さい。（事務局）

編集後記

師走の足音にせかされながらの編集でした。通信の発送は、名簿と照合しながらミスのないようにやっておりますが、年賀状の大混雑にまぎれて、万一、年内に届かないようなことがありましたら事務局まで御連絡下さい。新しい年の皆様の御多幸と友の会の一層の発展を願っております。（O）

1986年12月15日発行(年4回)Vol.2-3(通巻6号)

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

ASSOCIATES NEWS　No.6

編集　大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
発行　〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏(3)

美術館の建物の設計に当って、その美術館が展示、保存、調査研究のどの分野に主力を置いているかによって、建物の性格は大きく変って来ます。当館の場合は展示に重点を置いており、延床面積約2,500平方米の中で2階展示室は約1,015平方米と、約4割を占めています。この展示部門の平面プランを作るに当って、建築家に依頼したことは、「展示ロビー(A)を中心に、朝鮮陶磁部門(B)、中国陶磁部門(C)、企画展示部門(D)がそれぞれ独立しながら、同時に連繋を保つようなプラン」ということでした。当館の敷地は北に河川、南に道路をひかえ、東西に細長く伸びる地形のため制約が多く、結果的には、(A)を中心に、(B)と(C)がつながり、(D)は独立して設置せざるを得なくなりました。しかし、展示ロビーを中心に、朝鮮陶磁室へも中国陶磁室へも自由に出入りが出来る、つまり準備された鑑賞ルートと、束縛を受けない鑑賞ルートとが、鑑賞者の自由な意志によって選択できる、そのような平面プランが出来上りました。

準備された鑑賞ルートでは、まず最初に朝鮮陶磁からごらん頂き、中国陶磁は後になっています。これは東アジアの陶磁の源流が中国陶磁であることを考えますと、順序が逆のようにお感じになる方もあるでしょう。しかし、当館では、鑑賞者の心の動きに重点を置きました。つまり、中国陶磁と朝鮮陶磁の持つ性格、雰囲気の相違に留意しますと、個性が強く変化の多い中国陶磁を先に見てしまうと、比較的地味な朝鮮陶磁の印象が薄れてしまうことを怖れたからです。

また朝鮮陶磁部門では天井高を3,400ミリと低く抑え、室内照明は行っておりません。外界を見慣れた眼で展示室に一歩足を踏み入れると、暗さにとまどいながらも、自然に視線は展示ケースに集中することになります。しかし、それが続くと疲労感が加わりますので、途中の壁にあるスリットから差込む外光でそれを和ませ、また堂島川を見下ろせる小さなロビーでおくつろぎ頂けます。次の中国陶磁展示部門では、天井高を思い切って5,300ミリと高く上げ、間接照明によって部屋全体を明るくしています。陶磁器の回転台が現われ展示に変化をつけるのも、ここからです。自然採光空の天井が低く、室内も暗いのは、その前後の展示室が明るく大きい無機質の空間であることから、自然にご理解頂けることでしょう。疲れない美術館とよく言われるのも、当館が鑑賞者の心理的・肉体的疲労度を考慮に入れた空間プランを採用できたことが役立っているように思います。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長　伊藤郁太郎

◆第５回講演会要旨◆

「中国陶磁と金属器」
― 器形と装飾 ―

日時：昭和61年11月８日(土)　午後２時～４時
会場：中之島中央公会堂
講師：和泉市久保惣記念美術館 副館長　中野　徹 氏

本日お話し致しますテーマは、工芸史を研究する上で、それを産業史或いは経済史の方面から一度見直してみる必要があるのではないかということです。実際にはスライドを通して、このテーマの一部分である金属器と陶磁器とがどういう関わりを持ちながら展開していったかということについてお話ししたいと思います。その前に、中国の工芸について、青銅器・漆器・銀器・陶磁器等の間での様々な関わりについてお話を進めます。

中国の工芸で我々が最初に知りますのは、新石器時代の石器・玉器・加彩陶器等です。それらの多くは実際に生活で使用されたものですが、中には祖先に対する信仰や祭式のために祭祀用として特定の器形が発生している場合があります。殷・周時代の祭祀に使われる青銅器の多くの器形には、新石器時代の土器の器形を踏襲しながら成立した跡を見い出すことができます。そして一旦、青銅器が彝器（神様に常に供えておく器物）として成立した後は、その器形や文飾が工芸全般の主導的な役割を果すことになります。そのような状態が暫く続いた後、戦国時代の末期から漢時代にかけての時期に、従来の宗教のあり方が崩壊し始め、それにつれて青銅器の彝器も、しだいに工芸の主流から離れていくという状況が生じてよいります。三国時代の終り頃には、この彝器の伝統はほとんど消え、同時に技術的な衰退がおこってきます。技術的な衰えと宗教的な崩壊とは、どちらが先であったかという問題は非常に難しくて、ここで結論を申しあげることはできませんが、丁度その頃、中国には仏教を含めた大きな文化の波が押し寄せ、それに伴い新しい器物の形や技法が伝わってまいります。この新しい文化の波を契機として、唐時代には新しい技法・装飾が新たに銀器の中に取り入れられ、工芸の中で大きな役目を果すことになります。しかし銀器は、貴金属としての嗜好が強く、副葬される風習がなかったこと、また銀が貨幣として流通していたために、多くの銀器が鋳潰されてしまったこと等から、かつてあった大量の銀器を実際に今日見ることができなくなっています。そのために工芸と言えば、陶磁器を中心にした流れを先に考えてしまうということがあります。

Fig.1 青銅金銀象嵌雲気文鐘　Fig.2 灰陶加彩雲気文鐘

陶磁器が工芸の主導的な役目を果すようになるのは宋時代になってからです。この背景には、陶磁器が、多様化していく生活の要望にこたえるだけの技術的な要素を持ち始めたということがあります。即ち、様々な器形や装飾、或いは使い易さや便利さといった、生活の中での欲求を満たし得るまでに陶磁器の生産技術が成長してきたということになります。

そういう観点で宋時代の工芸の状況を考えてみますと、まず第一に、工芸が一巨産業として活動し始めますと、売れるか売れないかということが問題になり、その結果製品は販路を求めて広範囲に移動してまいります。近年中国での発掘が進むにつれて、春秋時代には既に、各地の産物がかなり広く動いていたということが明らかになってきています。陶磁器のみならず漆器や鏡、銀器等の工芸品の生産地が特定され、分業されて発達していたということが窺われます。第二に、地域的なものの移動と同時に、例えば銀器でよく売れるものを錫や陶磁器で写して作るといった、工芸の各分野間で相互に影響しあう動きがおこってまいりますし、また、例えば定窯で作られる器物の形態や文様が、景徳鎮をはじめとする多くの窯に広がるという同一分野内での広がりも見られます。その結果、少しテーマから離れますが、明器として作られた陶磁器から、かってあり、今はわからなくなってしまった漆器や金属器等のあり方や、当時の生活様式を類推し、確かめることができるということもままあります。

次に、具体的に金属器と陶磁器の関わりについて説明を申し上げます。唐時代の金属器の高台には、溶接して仕上げるという製作上の制約から、独特の形態がみられますが、それらが同時代の陶磁器の高台の作りに、やきものとしては必要がないにも関わらず、そのまま取り入れられているという例があります。更に、金属器の水注の把手は、金属の紐を折り曲げて鋲で打ちつけて接合するわけですが、この制度もやきものの水注を作る場合に写し取られています。また、やきものを製作する場合にロクロや高温の窯を使うということが、中国では古くから行なわれていますが、それは同時に青銅器・鏡・佐波理器等の金属器を作る場合にも用いられた技術です。このように共通の技術が使われている場合には、器形も似たものになっていますが、金属器の方で溶接や鋲による接合等がｉなわれ始めると、両者の形態に少しずつ違いが生じてまいります。以上申し上げましたことのいくつかの例をスライドで見て頂きましょう。

青銅器の中でも非常に精巧な作例で、金銀の象嵌で雲気文を表わした漢時代の鐘です(Fig.1)。この形態が、同時代の明器として作られた加彩陶器にそのまま写し取られています(Fig.2)。顔料で描かれた胴部の雲気文や、鋪首の装飾、少し段をつけた高台の作りなどにそれが正確に表われています。それが、やや時代がさがってきますと、全体の構造に青銅器の意匠を残しながらも、細部には文様や鋪首の簡略化が見られるようになります。

漢時代を代表する器形の一つに鼎があります。煮炊きに使用された青銅の鼎の器表に、漆等で文様を描き、祭祀用或いは明器としての役割を持たせた作例(Fig.3)。こちらはそれを緑釉陶で作ったものです(Fig.4)。青銅器のものと比較してみますと、本来は使用上の意味を持っていた部分、即ち、把手や足の形・足の付く位置・蓋の突起等がその意味を失ない次第に変形・簡略化していく様子が窺えます。例えば三足の位置は、炉の上に載せた場合に空気の流通をとるために外側に付いていたものが、ずっと中へ入ってしまっています。

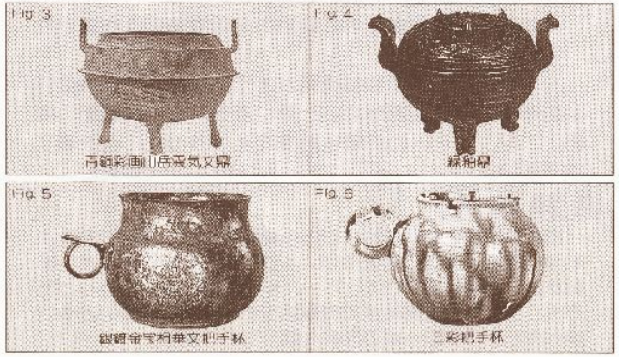
Fig.3 青銅彩画饕餮雲気文鼎　Fig.4 緑釉鼎
Fig.5 銀鍍金宝相華文把手杯　Fig.6 三彩把手杯

六朝・北魏の頃に西方から中国へ押し寄せた文化の波に乗って伝わった器物の形の一つに、このように現在のコーヒーカップと同じ機能をもった金属器があります(Fig.5)。把手の上部には指を抑える平板が付きます。この器形が陶磁器に写されますと、金属器の製造方法との違いから、把手の部分はリング状のものを接合しただけになっています(Fig.6)。

これは唐時代の銀製の酒壺ですが、革袋の形態を写したものです(Fig.7)。そしてこれは遼時代の、革袋形の緑釉の壺です(Fig.8)。側面から底面にかけての部分に、革袋の縫い目をそのまま装飾として取り入れています。また蓋の作りには、前者の銀器との共通性が見られます。唐が滅んだ後に、中国の北部に興った遼という国では、唐文化を取り入れることが盛んに行なわれており、唐の銀器を写した遼の銀器、或いは更にそれを写した三彩や緑釉というものが作られています。

ペルシャの13世紀前後の金属器の水注と、明時代の永楽から宣德にかけての頃に作られた青花の水注です(Fig.9,10)。このような例を見ますと、近世になっても依然として西方の金属器の影響を受けながら、陶磁の製作が行なわれていたこと、両者の間には非常に強い意匠の関わりがあったことがわかってきます。ところが片方の金属器というものを我々はほとんど今日見ることができなくなっているために、どうしても陶磁器を中心とした工芸というものを考えがちです。しかし常にどこかで、金属器をはじめとした他の工芸の存在を考えながら、中国の工芸史を捉えていくことが大切なのではないかということで、これまでのお話を聞いて頂いた訳です。

Fig.7 金銀皮囊壺　Fig.8 緑釉皮囊壺
Fig.9 青銅鍍金銀唐草文水注　Fig.10 青花唐草文水注

注：写真は下記の著書より転載しました。「満城漢墓発掘報告」「漢代の美術」「唐唐の美術」「文化大革命期間出土文物」「Les Trésors de L'Iran」「世界陶磁全集」10・13・14(小学館)

（文責：友の会事務局）

プロフィール
中野　徹 氏

1941年、大阪生れ。関西学院大学文学部大学院美術史専攻博士課程修了。現在、和泉市久保惣記念美術館副館長。著書は、「日本の文様・唐草」光琳社、「展開写真による中国の文様」平凡社など。